



長濱教授（左）と難波館長

エースと東京芸大の産学プロジェクト10年

長濱東京芸大教授と難波館長に聞く次のスタンダード／産学振興の一助に

エース東京店内の「世界のカバン博物館」では「ポストリュックサック」をテーマに作品を展示している

バッグメーカーのエースと東京芸術大学の産学協同プロジェクトが今年で節目の10回目を迎えた。毎年テーマを設け、同大美術学部デザイン科の学生が制作した作品を、エース東京店内の「世界のカバン博物館」で展示する企画。3月12日まで「ポストリュックサック」をテーマに「2022 モチハコブカタチ展」を開催している。東京芸術大学の長濱雅彦教授と、世界のカバン博物館の難波敏史館長に産学連携の意義を聞いた。

■長濱東京芸大学教授

デザインの授業で大切なのは、実際に作り、他者の評価を知ることです。かばんのような身近なプロダクトをデザインする機会は意外と少なく、しかも様々な来館者の目に触れることはとても貴重です。

デザイン科の学生は家電や自動車などの工業デザイナーを志望する人が多かったのが、最近では生活に身近なロングライフデザインの製品に人気が集まっています。エースのバッグやラゲージは、スタンダードなプロダクトとしてとても秀でたデザイン。連携できる意義はとても大きいです。

エースは業界で初めてナイロン製のかばんを世の中に出したそうです。当時としては「ポストバッグ」を考えた結果なのでしょうが、今では当たり前なものとなっています。「ポストリュックサック」というテーマも、次のスタンダードを考えようという思いがあります。

作品を見ると、洋服やエプロン、財布、紙袋など様々なアイテムにバッグの機能を持たせたデザインが目立ちました。アイテムの領域が溶け、もっと自由なデザインが広がれば、実はバッグの市場はもっと大きいのではないかと感じます。

■難波敏史館長

「世界のカバン博物館」館長 業界のリーディングカンパニーとして産業振興の一助になればと始めた産学協同プロジェクト。これからも将来のデザイナー創出といった人材育成にも貢献していきたいですね。

一人ひとりの学生のライフスタイルやストーリーが込められた作品はとても個性的で、「ポストリュックサック」の捉え方は多様です。人の数だけ「モチハコブカタチ」があります。

当社は、ナイロン素材のかばんや縦型のスーツケースを業界で初めて市場に投入するなど、バッグの歴史を語るうえでのエポックメイキングがたくさんあります。世界のカバン博物館ではそうした歴史・文化を伝承する役割もあります。来館者は年々増加傾向にあり、学生の企画展を毎年楽しみにしてくださる方や、東京芸大のOB・OGの来館も増えています。